



発掘 文学の宝



今回の、「苓北町の文学の宝」は獅子文六原作で新聞連載から映画化された『南の風』の後編です。(映画作品の紹介は、広報れいほく7月号で掲載した内容と前後しています。)小説の断片と、天草ロケで繰り広げられた当時の様子がわかる楽しい内容となっています。

企画/ドットワークス 下川嘉奈

『南の風 瑞枝の巻』

1942年9月17日公開

原作：獅子文六 監督：吉村公三郎

出演：佐分利信、高峰三枝子、
水戸光子、笠智衆ほか



※「続・南の風」の前編にあたる作品。

獅子文六の原作 「南の風」映画ロケ

平井 建治

「これから先は、わしもよ
う知っている」

重助は、急に元気づいてき
た。鹿児島出身の彼が修学旅
行で来たのは、南天草から富
岡までだったそうである。バ
スを降りた六郎太は、ポカン
として四辺^{あたり}を見廻した。

「君、これが富岡の町かい」
「そうじゃ」

「しかし、街はずれだろう」

「いや、本通りじゃ」

天草第二の都会じゃとか、
雲丹はここで採れるのが一番
うまい、と重助は言ったが、
恐ろしく死んだような町に思
えた。頼山陽の碑を見に行こ
うと西側の丘へ上ると、「重
助君、こつちにも海があるぞ」

と、六郎太は驚きの声をあげ
た。重助は街道外れの袋小路
の奥にある「百足屋」を案内
した。礼儀正しい女将や女中
の接待で、薄暗い湯殿の五右
衛門風呂に浸かり、海に面し
た座敷で、伊勢海老、サザエ、
烏賊^{いか}など豪華な膳^{ばん}に目を見
張った。座敷の外はすぐ海で、
潮のひたひたと寄せる波音が
聞こえた。とつぷり日が暮れ
ると巴崎の上には満月が輝い
ていた。

翌日、二人は女将が勧める
富岡稻荷神社に参拝した。気
味が悪いほど鬱蒼とした城山
で、白狐^{しろきつね}が住むという楠の祠
を拜んだ。その帰途、森のは
ずれで思いがけず、シンガ
ポールで知り合ったお玉さん

と出会った。十二年振りのあ
まりにも不思議過ぎる出会い
だったが、お玉さんの故郷は
富岡だったのである。

映画ロケ隊は、監督・吉村
公三郎、六郎太の佐分利信、
重助の笠智衆、お玉さんの水
戸光子。ロケは、三丁目異人
館と四丁目御旅所で行われ
た。エピソードが残っている。
水戸光子が水着姿で座敷を横
切って、裏の石垣から海に飛
び込んだこと。吉村監督と木
下恵介監督が口論、ふてく
された監督が一人でボートを
漕ぎ出し、オールを流して巴
湾を漂流、一丁目の青年が泳
いで救助したこと。出来町の
平野馬車屋の客馬車^{きやくばしゃ}が使われ
たこと。逗留中、三文字屋の
赤ん坊の入院騒動で、岡野屋
に宿屋が代わったのもハプニ
ングだった。

文六は、横浜の裕福な家庭
に育ち、パリ留学を経て、新
劇(文学座)を創設した演劇
人である。運命的な三度の結
婚、戦前と戦後の二つの昭和
を生き抜いたユーモア文学の
流行作家だった。稀代の美食
家で、グルメ批評でも名を馳

せた。損得勘定が鋭く、出版
社に原稿料を事前に要望、三
十年間原稿が遅れることは一
度もない合理主義者であっ
た。ペンネームは、四四の十
六をもじったとか、文豪(五)
でないから文六にしたとか、
妙に愛嬌があった。

「南の風」は荒唐無稽な物
語であるが、平明で向日性の
ある文章は、はじめの感じがな
く、ぐんぐんと文六の世界へ
引き込んでいく。昭和の漱石
を自称した文六の作品が、こ
のまま埋もれていくのがとて
も惜しい。

本



『南の風』 獅子文六著、新潮社

ニート暮らしのおぼっちゃ
ま六郎太が、旧友の儲け話に
乗り繰り広げられるドタバタ
劇。天草、富岡の描写が嬉し
い、楽しい一冊です。